

ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方

岐阜県文化財保護センター授業改善研究グループ

(吉田靖 河合洋尚 古屋寿彦 大本直人 佐竹正憲 笠井慎吾 井手大介)

1 はじめに

「この土器、こげで真っ黒だ。」「こっちの土器はつるつるで気持ちいい。」「さわると痛いくらい尖った石器だな。」「全部自分たちでつくったのだ。」「むかしの人ってすごいなあ。」、出前授業で聞く、児童生徒の素直な感想だ。児童生徒の反応は多様で、すべてほほえましい。

岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）の目的は、「岐阜県内の埋蔵文化財の発掘調査及び研究、出土品の適切な保存及び活用、埋蔵文化財保護思想の普及を行い、もって本県文化の振興に寄与すること」であり、これまでに多くの発掘調査成果を上げ、保存と活用を進めると共に、様々な講座や出前トークの開催によって埋蔵文化財保護思想の普及に努めてきた。特に、県内の学校と連携して「ふるさと岐阜」に対する関心と理解を深めていただくため、平成 19 年度からは、学校に出向いて授業を行う「出前授業」を実施しており、平成 25 年度までの 7 年間の実践によって多くの成果を上げてきたが、一方で、後述するような課題も散見された。これは、例年出前授業の担当者が単独で年間の活動を進める体制であり、なかなか複数の目で検討する機会がなかったことも要因の一つではないかと考えられた。そこで、平成 26 年度に当センターが開始した研究事業を契機に授業改善研究グループを発足させ、研究グループだけでなく当センター職員全員が授業を行いながら、平成 26・27 年度の 2 年間で、特に小中学校を対象とした「出前授業のあり方」について研究を進めることにした。

(河合)

2 出前授業の現状と研究主題設定の理由

図 1 は、平成 21 年度から平成 25 年度までの当センターの出前授業を実施した学校の位置を示す。この図から、県内の多くの学校で出前授業を実践していることが分かる。しか

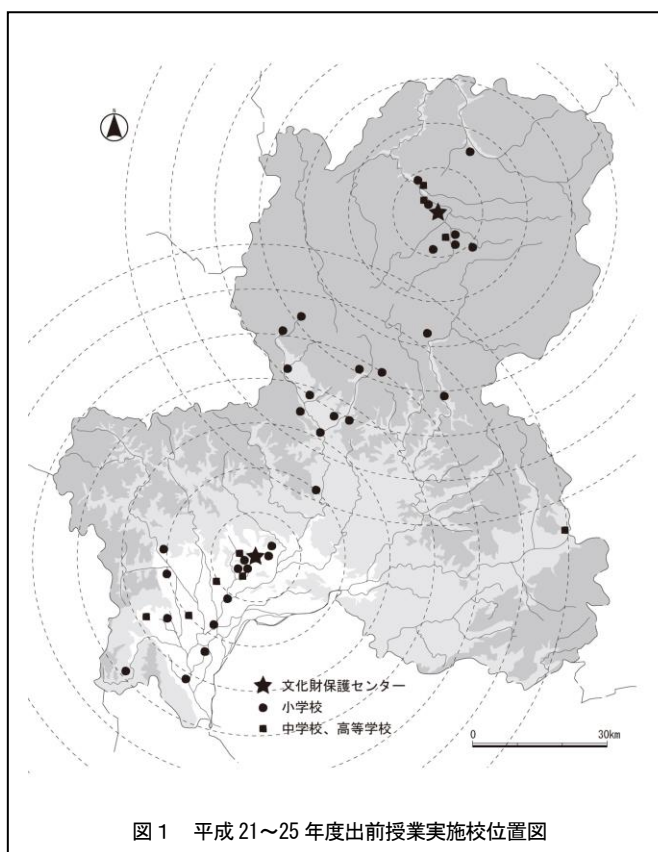


図 1 平成 21～25 年度出前授業実施校位置図

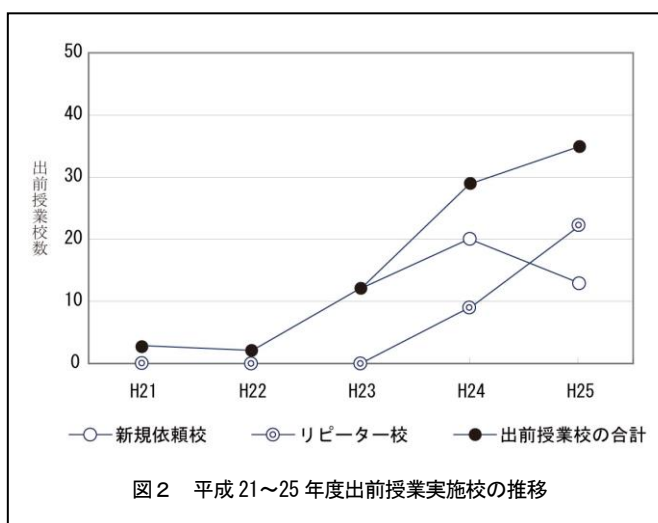
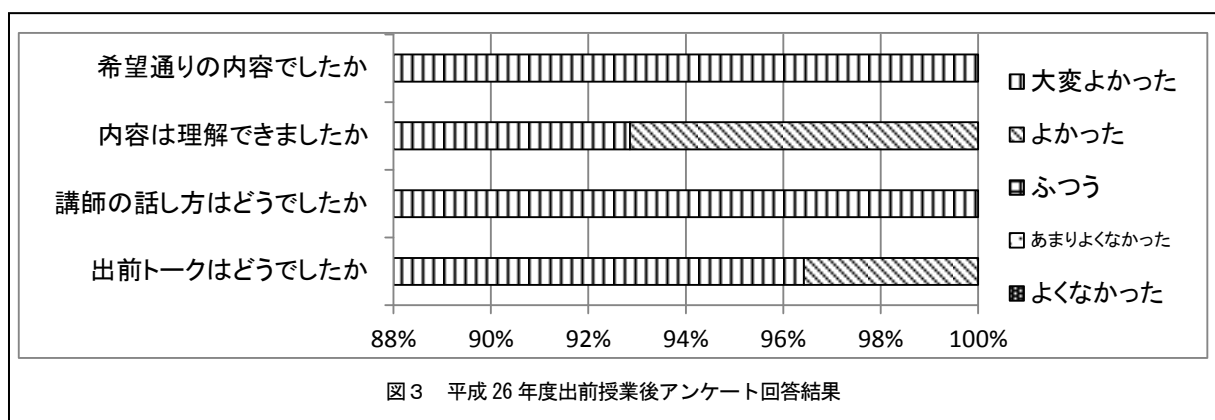


図 2 平成 21～25 年度出前授業実施校の推移

し、実施地域が偏っており、まだ実践の少ない地域も多い。

図2は、当センターの出前授業件数の推移である。平成21年度から平成25年度までの実績から、年々増加していること、継続依頼校が多いことが分かる。継続校が多い理由の一端を「実施校アンケート」に見ることができる。

図3は、実施校アンケート回答結果をまとめたものである（平成26年6月末時点における実施35校のうち回答23校）。回答は、出前授業を実施した学級の担任から得ている。すべての質問事項において、「大変よかった」、「よかった」となっており、出前授業がニーズに対応できていることが分かる。具体的には、「授業者の授業雰囲気作り」、「詳しくわかりやすい説明」、「実物を見てふれる体験的活動」などに良さがあるとの回答を得ている。一方で、「児童生徒の発達段階によっては多少難しく感じる」、「説明が多い場面では児童生徒たちの興味・関心が薄れる」などという指摘も見られる。



そこで、児童生徒の身近な地域に応じた教材を開発し、その教材を指導案に位置付け指導方法を改善すれば、学校や児童生徒に、ふるさとの歴史に興味・関心をもたせることができるのではないかと考え、研究テーマを「ふるさとの歴史に興味・関心をもてる出前授業のあり方」とした（別紙1「授業改善研究構想図」参照）。

（河合）

3 研究内容設定

研究内容は、以下の3点を設定した（別紙1参照）。

（1）地域・時代に合わせた教材と児童生徒に魅力的な資料の開発

児童生徒に、歴史事象をより身近なものに感じてもらうために、当センターが所蔵する多くの調査成果を県内6地域別に教材化・資料化する内容とした。

（2）指導案と板書計画の作成及び単元指導計画への位置付けの明確化

学習指導要領及び県内公立学校採択教科書の学習目標に準じて、当センター出前授業学習指導案のねらいを明確にし、単元指導計画への位置付けを検討するとともに、そのねらいを達成するために、現在実践している学習指導案を見直し、児童生徒がより興味・関心をもてるような展開を再検討する内容とした。

（3）ふるさとの歴史に興味・関心をもてる指導方法の工夫

児童生徒の学習活動を円滑に進めるために、指導・援助のあり方とその明確化や、児童生徒の思考の流れに沿った学習ノートの開発を行う内容とした。

さらに、実践が適切であるかを評価する方法として、児童生徒の感想を把握するために「授業ノート」を、学校側の感想を把握するために「実施校アンケート」を、当センター職員の指導案や指導方法に対する自己評価を把握するために「職員アンケート」を作成して分析することで、研究の成果と課題を明らかにしていくことにした。

なお、研究は2か年とし、1年目（平成26年度）は、研究内容の3点について検討・作成し、2年目（平成27年度）は、1年目に検討・作成した内容について出前授業を実践しながら修正していき、当センターの出前授業を確立させる計画とした。

（河合）

4 平成26年度の実践

（1）地域・時代に合わせた教材と児童生徒に魅力的な資料の開発

①教材の開発

児童生徒が、ふるさとの歴史について一層関心をもつことができるように、地域・時代に合わせた教材の開発を行った。

まず、地域・時代に合わせた教材の開発について紹介する。図4は、当センターの発掘調査成果のうち、出土品や遺跡の特徴から教材として活用するのに有効であると考えられる遺跡を抽出したものである。

図4のとおり、時代別分類・地域別分類を

することで、どの時代・地域を対象とする出前授業を行う場合でも、児童生徒の興味・関心を惹きつけることができるように、住んでいる地域の遺跡の調査成果を活かした出前授業を提供できるよう教材化した。

教材の開発に当たって大切にしたいことは、児童生徒が当時の人々のくらしぶりを実感できることである。出土品を通して当時の人々のくらしぶりに触れることができれば、それが歴史を学ぶ喜びを味わうことにつながり、さらには地域の歴史への関心が高まるのではないかと考えた。時代に合わせた教材の開発について2つの時代の学習授業案を紹介する。

一つ目は、縄文時代の例である。縄文時代は授業依頼が最も多く、これまでの実践も多い。そこで、これまでの実践における課題をもとに、持参する出土品を表1のように見直した。

旧指導案では、縄文時代において生活の様々な場面で使われた出土品を並列して取り上げていたが、改善した指導案では、「食」に関わる場面に使用された出土品に特化することにした。その理由は以下の2点である。

- ・「食」は、児童生徒にとって身近なものであり、当時の人々のくらしぶりを想像しやすい対象ではないかと考えたため。
- ・授業の終末に、縄文土器を提示することで、

6地域別分類						
時代	岐阜	西濃	美濃	可茂	東濃	飛騨
縄文	戸入村平	戸入村平 山手宮前 権原村平 塚奥山	有坂薬師堂	富田清友 野並 東野	大平	岩垣内 赤保木 上岩野
弥生	岩田東 A	荒尾南 今宿	小洞	金ヶ崎 柿田	荒尾南 今宿	ウバ万平 中野大洞平 与島
古墳	船山北 番堀山	南高野	南青柳 深橋前 小洞西	赤池 杉ヶ洞 後平茶白山	元三ヶ根 ホヤノ木	冬興山崎 深別戸
古代	広畑野口	高畑 寺屋敷	鶴尾山城 重竹	越戸南	柿田	大江 青葉寺庵寺
中世	芥見町屋 船山北	徳山陣屋 二ノ井	重竹 鶴尾山城	柿田 上東土浦畑	丸石 東町	三枝城 下切

* 地域に調査事例がない場合は、他地域の特徴的な遺跡とした。

図4 時代別・地域別提示遺跡抽出一覧

表1 縄文時代授業持参出土品新旧対応表

旧指導案	→	改善した指導案
打製石斧、磨製石斧 石鏃、石錘 石錐、石匙	授業で活用する出土品	打製石斧、石鏃 石錘、磨石 生活の中でも、「食」 に関わる場面で使わ れた出土品
生活の様々な場面で 使われた出土品		

石鏃を使って獲った「シカやイノシシの肉」、石錘を使ってとった「魚」、磨石で磨りつぶした「木の実」、打製石斧を使って掘った「イモなどの根菜類」が、その土器の中で煮炊きされていたことがイメージできると考えたため。

2つ目は、中世の例である。当センターのホームページに学習指導案を掲載しているものの、縄文時代、弥生時代、古墳時代への依頼が多くを占め、中世の授業は未実施である。その要因は、前者は学校で授業を行うに当たり提示資料が得にくく、当センター所蔵の出土品は資料として魅力があること、文献資料が比較的豊富に存在する古代以降は、提示資料が得やすく学習が組み立て易いことが考えられる。当センターは中世における出土品も多数所蔵しており、児童生徒がその出土品に触れる機会を提供できるよう、教材と学習過程の見直しを行った。中世における商業の発達においても、表2のように持参する出土品を見直し、学習の流れに組み入れた。

旧指導案で教材化した2種類の出土品のうち、古銭（中国貨幣）に焦点を当てた学習授業案を作成した。古銭を取り上げた理由は、以下の2点である。

- ・古銭は、当時の「お金」であり、それが発掘調査で出土したという事実は、児童生徒の関心を高めることにつながると考えたため。
- ・古銭が流通したことで、中世の日本において貨幣経済が浸透し、これが今の自分たちの生活とつながることから、児童生徒の関心が高まると考えたため。

②魅力的な資料の作成

出前授業の最大の魅力は、過去の人々が実際に手にしていた「出土品」を持参し、触れられることにある。児童生徒が出土品に触れた時の感動は容易に想像でき、それだけでも十分に価値のあることだと考える。しかし、その感動をさらにふるさとの歴史への関心につなげるための手立てとして、児童生徒にとって魅力的な資料の作成を行った。

具体的には、出前授業で持参した出土品から当時の人々の生活を想像したり、当時の人々の思いに触れたりするための手だてとなる資料である。

「日本で使われた中国の貨幣と商業経済の発達（中世）」の学習において作成した資料を紹介する。この授業で取り上げる出土品は古銭である。児童生徒が手にした古銭を当時の人々の生活とつながられるようにするために、次のような資料の活用を考え

表2 中世授業持参出土品新旧対応表

旧指導案	→	改善した指導案
古銭（中国貨幣） 中国製陶磁器	授業で活用する出土品	古銭（中国貨幣）
古銭、陶磁器の2種類の出土品		古銭に焦点を当てて、商業の発達を考える



写真1 『一遍上人絵伝』の提示

た。写真1は、『一遍上人絵伝』を児童に提示したときの様子である。この資料の中には、貨幣を使ってもものの取引が行われている場面が2か所ある。絵が小さいためその様子が十分に把握できないことも考えられるので、拡大したものを準備しておき、児童生徒が自分の目で確認し、納得できるようにした。また、絵資料に描かれている貨幣は束になっていることから、貨幣が束になっている写真資料を提示し、実際の様子が想像できるように工夫した。

中世は、貨幣の流通によって貨幣経済が浸透する。現在の自分たちの暮らしとつながる部分であり、貨幣経済が浸透していく過程については丁寧におさえ、さらに児童生徒が「貨幣を使って物の取引をする便利さ」を実感できるようにしたいと考えて資料を作成した。資料では、貨幣経済が浸透する以前の取引で使われていた米1俵と、貨幣400枚の価値が等しいことを図で表現する。さらに、その重さを比較し、同じ価値でも米60kgに対して、貨幣1.3kgと古銭の方が軽いことを捉えさせる。その上で、「貨幣を使ってものの取引をする便利さ」を実感できるように、馬1頭を買う場面を設定し、「馬1頭を買うためには、米5俵が必要です。どのくらいの重さになるだろう。」と具体的な場面で考えられるようにした。児童生徒とその場面を想像しながら、「貨幣だったらどうですか。」と尋ねることで、貨幣を使って物の取引をする便利さを実感させられると考えた。

地域出土品に触れることで、当時の人々の暮らしぶりを想像し、自分が触れた「出土品」と当時の人々の生活がつながり、ふるさとの歴史への関心が高まると考えた。(笠井)

(2) 指導案と板書計画の作成及び単元指導計画への位置付けの明確化

①学習指導案と板書計画の作成

平成25年度までの授業実践で明らかになった出前授業の成果と課題を踏まえ、以下のような方針に従って指導案の検討を図った。

- ・出土品に触れる活動を中心に授業を組み立てる。授業者による説明は必要最小限とし、児童生徒の主体的な活動によって授業のねらいに迫る。また、出土品はできるだけ身近な地域から出土したものをを用いる。
- ・授業の終盤に、授業を行う学校周辺の遺跡を紹介する場を設けることで、「ふるさと岐阜」に対する愛情を育てる。
- ・当センター職員全員が授業のねらいを達成させられるよう、学習指導案・板書計画・授業シナリオを作成し、教師と児童生徒の動き、予想できる児童生徒の反応、ねらいに迫る意見を引き出すための発問等を意図的・具体的に計画する。

この3点について研究を進めることで児童生徒が歴史学習に対してより興味・関心をもつことができると考えた。

ここでは、「古代」指導案の改善例について述べる。

改善前の指導案では、県内で出土した美濃刻印須恵器の観察に始まり、律令体制下の税制と、朝廷と美濃国との関わりに気付かせる前半部分と、県内で出土した寺の瓦と仏具を観察し、県内で仏教が広まっていたことを理解させる後半部分との2部構成になっていた。この授業では、土器を観察する活動が位置付けられてはいるが、この活動が授業のねらいに直接つながらず、ねらいの達成のためには授業者による解説を聞き、理解する作業が必要となるという課題がある。また、律令制度についての知識が定着していな

いと授業者による解説を理解することも難しい。この授業には、研究主題設定の理由で述べているように「児童生徒の発達段階によっては多少難しく感じる」と「説明が多い場面では児童生徒たちの興味・関心が薄れる」ことから、次のような改善を行った。

(a) 学習指導案の見直し(図5)

出土品に触れる活動を通して、「当時の人々の工夫や努力」に焦点化できるよう、縄文・弥生・古墳・古代の各時代の土器を観察し、それぞれの特徴を捉えて比較する活動を位置付けた。観察した事実(土器製作における当時の人々の工夫や努力)から、奥に潜む社会的事象(生活の向上)の意味について考えさせる

ことでねらいに迫ることができるようにした。仏教も律令制も古代を理解する上で欠かせないキーワードだが、聖徳太子や聖武天皇と結び付けやすい仏教のみを扱い、活動を通して得た「当時の人々の工夫や努力」を、仏具や瓦と結び付け、必然性のある学習となるようにした。終末では、学習した事実が身近な地域の歴史事象であることを知らせるために地域の遺跡について紹介する場を設けて、興味・関心を高めることとした。

(b) 板書計画と授業シナリオの作成(図6・7)

土器の観察後の全体交流では、児童生徒から多くの意見が出されることが予想される。そこで、児童生徒一人ひとりの意見を大切にしつつ、スムーズに交流を進行するために、予想される意見を板書計画と授業

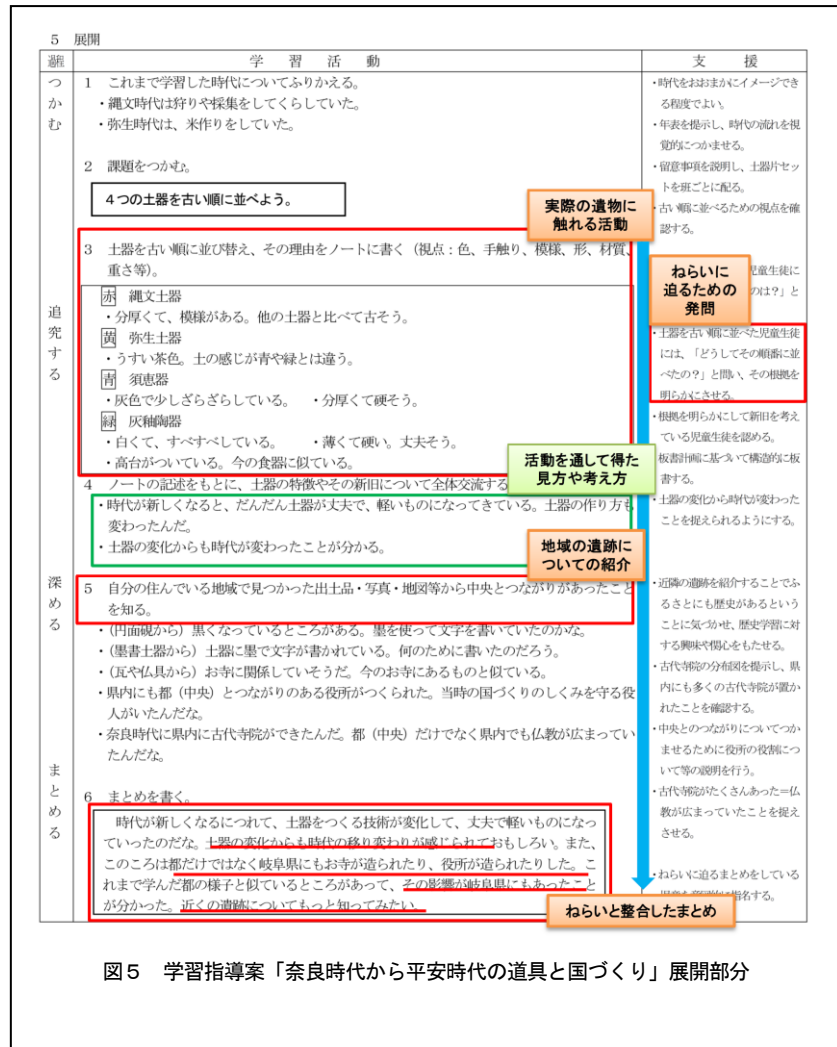


図5 学習指導案「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」展開部分

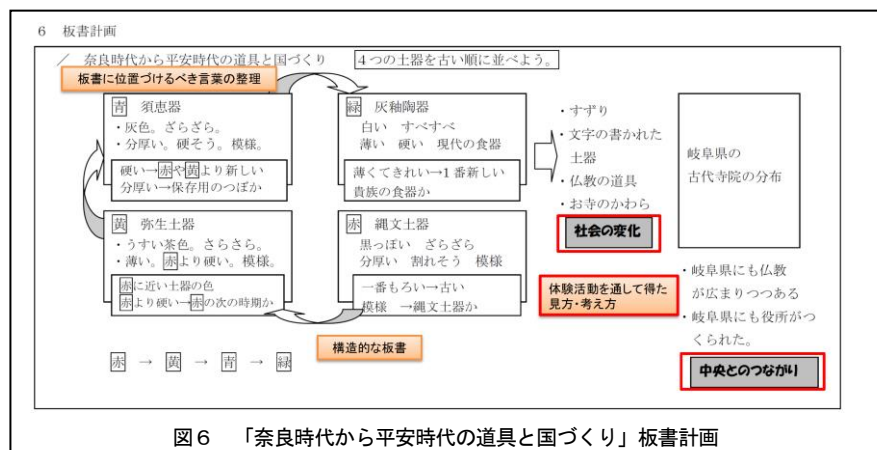


図6 「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」板書計画

シナリオで整理した。板書を構造的に計画することで、児童生徒が自分たちの思考の流れを一目で振り返ることができるとともに、授業者が不足する意見を把握し、引き出したい意見をどのように問い返せばよいかがシナリオによって明確となり、授業をスムーズに行うこと

ができると考えた。また、体験活動と全体交流を通して得た見方や考え方を、まとめとして位置付けることで、ねらいに到達しやすいと考えた。

こうした改善を行うことで、平成 26 年度に明らかとなった課題を解決でき、より興味・関心をもって学習に取り組むことにつながると考えた。

(佐竹)

②単元指導計画との整合性

学校の学習活動に確実に位置づくように、当センターの指導案が学習指導要領及び小中学校採択教科書の単元指導計画の中でどのように位置付くのか、どのように位置付けると効果的であるかを検討した。

(a) 単元指導計画の検討

小・中学校採択教科書の単元指導計画は表 3・4 に示したとおりである。当センターの学習指導案は、原始から中世の学習において表中のとおり位置付けることができる。すべての時代において石器・土器・金属製品などの出土品を資料として用い、その観察からその時代の人々の生き方や特徴を捉える学習内容

表 3 単元指導計画（小学校）

章	総時数	時数	学習内容	当センター指導案
導入	1	1	歴史博物館へ行ってみよう	
1 縄文のむらから古墳のくにへ	2	1	三内丸山遺跡と縄文のむら	指導案 1
	3	2	板付遺跡と米づくり	指導案 2
	4	3	縄文と弥生のくらし	指導案 2
	5	4	学習の進め方	
	6	5	むらからくにへ	
	7	6	巨大古墳と豪族	指導案 3
2 天皇中心の国づくり	8	7	大和朝廷と国土の統一	
	9	8	学習のまとめ	
	10	9	さまざまな形の古墳	
	11	1	世界文化遺産の法隆寺	
	12	2	聖徳太子の国づくり	
	13	3	大化の改新と天皇の力の広がり	
	14	4	仏の力で国を治める	指導案 4
	15	5	全国から集められた人々が大仏をつくる	
	16	6	大陸の文化を学ぶ	
	17	7	貴族のくらし	
3 武士の世の中へ	18	8	日本風の文化が生まれる	
	19	9	学習のまとめ	
	20	10	平安時代の子ども遊び一年中行事絵巻	
	21	1	武士の登場と武士のくらし	
	22	2	武士の政治の始まり	
	23	3	源氏と平氏が戦う	
	24	4	頼朝が東国を治める	
4 今に伝わる室町文化	25	5	元の大軍がせめてくる	
	26	6	学習のまとめ	
	27	7	街道に残る鎌倉武士のエピソード	
	28	1	金閣と銀閣	
	29	2	書院造と室町文化	
	30	3	雪舟とすみ絵	
	31	4	生活の中の室町文化	指導案 5
	32	5	学習のまとめ	
	33	6	室町時代の京都の祭りー祇園祭礼図屏風	

表 4 単元指導計画（中学校）

章	節	総時数	時数	学習内容	当センター指導案
1 身近な地域の歴史		1	1	体験しよう	
		2	2	調べよう	
		3	3	調べよう	
		4	4	調べよう	
		5	5	まとめよう	
		6	6	考えよう	
2 古代までの日本	文明のおこりと日本の成り立ち	7	1	章の導入	
		8	2	世界の古代文明と宗教のおこり	
		9	3	世界の古代文明と宗教のおこり	
		10	4	（世界の古代文明と宗教のおこり）	
		11	5	世界の古代文明と宗教のおこり	
		12	6	日本列島誕生と縄文文化	指導案 1
	古代国家の歩みと東アジア世界	13	7	弥生文化と邪馬台国	指導案 2
		14	8	大王の時代	指導案 3
		15	1	聖徳太子の政治改革	
		16	2	大化の改新	
		17	3	律令国家の成立と平城京	
		18	4	奈良時代の人々のくらし	指導案 4
		19	5	天平文化	
		20	6	平安京と東アジアの変化	
3 中世の日本	武士の台頭と鎌倉幕府	21	7	摂関政治と文化の国風化	
		22	8	（考古学のとびら）	指導案 6
		23	9	章のまとめ	
		24	1	章の導入	
		25	2	武士の成長	
		26	3	武家政権の成立	
	東アジア世界とのかかわりと社会の変動	27	4	武士と民衆の生活	
		28	5	鎌倉時代の文化と宗教	
		29	1	モンゴルの襲来と日本	
		30	2	南北朝の動乱と室町幕府	
		31	3	東アジアとの交流	指導案 5
		32	4	産業の発達と民衆の生活	
		33	5	応仁の乱と戦国大名	
		34	6	室町文化とその広がり	
		35	7	（東アジア世界の朝貢体制と琉球王国）	
		36	8	（室町時代の生活文化と現代）	
		37	9	章のまとめ	

図 7 「奈良時代から平安時代の道具と国づくり」授業シナリオ（一部抜粋）

を構成した。さらに、朝鮮半島や中国から伝わった古墳時代の須恵器・古代の仏教・中世の宋銭を用いた学習を位置付けることで、東アジアとのつながりを取り上げる中学校の歴史学習にも対応できると考えた。

(b) 単元指導計画における出前授業の位置付け

単元指導計画に、出前授業をどう位置付けると効果的であるか検討した。これまで出前授業を実施した学校では、単元指導計画における位置付け方が3通りあった。1つ目は、単元の導入時である。歴史学習の最初に土器や石器などの実物に触れる活動を通して、歴史学習に対する興味・関心を高めるねらいがある。多くは、縄文時代や弥生時代の学習指導案で展開している。2つ目は、単元の流れに即して行う授業である。これは、時代の学習に応じて位置付ける方法である。例えば弥生時代を学習する場合、前時に縄文時代の学習を終えており、既習事項を生かして変化の様子を比較できる。3つ目は、単元の終末時である。学習のまとめとして「地域にはどのような歴史があったのか」について、土器に触れる体験を通じて学び、教科書で学んできた歴史について地域の調査成果から捉えることで、より身近なものにすることができる。このように、位置付けが異なっても、ねらいを明確にして授業を進めることで、効果が上がると考えた。

(大本)

(3) ふるさとの歴史に興味・関心がもてる指導方法の工夫

①指導・援助のあり方と指導方法の明確化

授業を実施する上で重要なことは、当センターのどの職員が授業を実施しても限られた時間で学習のねらいに到達できるような適切な指導・援助である。指導・援助のあり方や指導方法を明確にすることによって、適切に授業を展開することができ、児童生徒に対し、ふるさとの歴史に興味・関心を高めることができる考えた。

(a) 意欲を高めるための指導・援助

出土品に触れる活動を位置付けることから意欲的に取り組むことができる児童生徒が多いと思われるが、その意欲をさらに高め、スムーズに学習に取り組むことができる環境を整えるために多様な指導・援助について検討した。例えば、「古墳時代の文化」の学習における指導・援助は以下のとおりである。

・土器片の個別配付と観察時間の保障

すべての児童生徒が出土品に触れ、じっくり観察できるように観察用の土器片を個々に1セット配付した。また、観察する時間を確保することで、意欲的に学習に向かうことができる考えた。

・同器種による比較

弥生土器の高坏片と須恵器の坏部片というように、異なる時代の土器で類似する器種を扱うことにより、比較する観点が明確になり、意欲的に観察することができると考えた。

・色シールの活用 (写真2)

配付する土器片に色シールを貼って視覚支



写真2 色シールを貼った土器

援することで、土器名を覚えなくてもその色を用いて書いたり話したりすれば、学習への抵抗感を和らげ、どの児童生徒も特徴を観察する活動に集中できると考えた。

・机間指導

観察時間に個々の様子を見て回り、どのような視点で観察しているか把握し、多様な視点で観察できるように言葉をかけたり、ノートに朱を入れたりすることで、自信を持って活動に取り組むことができ、意欲的に交流できると考えた。また、個人追究で意欲的に活動している児童生徒への認めを周りに広めることで、児童生徒により高まりたいという意識をもたせ、積極的な追究につながると考えた。

(b) 指導方法の明確化

出前授業を実施するに当たり、当センターとして大切にしたいことは何かを明らかにし、授業者が適切に指導でき、学習のねらいが達成できるようにするために、学習指導案に沿って「授業シナリオ（別紙2～7）」を全6時間分作成した。

・導入

児童生徒の既習内容や、生活体験を交流するという導入にした。既習内容については、歴史学習に対する抵抗感を減らすために、「〇〇時代と聞いて、思いつくことはなんですか。」という発問に統一した。また、文字や図表などの資料に対して抵抗感を示す児童生徒に配慮し、出土品を入れたコンテナを示しながら中身に関心が向くような問いかけをすることで、すべての児童生徒がスムーズに学習に取り組み始められると考えた。

・追究

個人追究では、観察した項目の数値目標を掲げたり、「考古学者ランク」を示したりすることで、意見を書く意欲につながると考えた。

全体交流では、根拠を明確にして発言させることで、視点を絞って特徴の違いが比較しやすくなると考えた。さらに自分たちで話し合いながらまとめていく活動を仕組むことで、自分たちの力で見つけた特徴だと自覚し、学習に対する自信を生むと考えた。

深める過程では、工夫した理由やその技術のよさについて問いかけることで、よりよい技術の獲得は人々の生活の向上につながり、その営みは現在の私たちと共通していることに気付かせることができると考えた。

・まとめ

本時の振り返りを書く時間を保障し、机間指導によって学習のねらいに迫るまとめをしている児童生徒を把握し、意図的に指名して全体に広げることで、学習のねらいが達成できると考えた。

授業の結びでは、児童生徒の真剣に観察する姿、埋蔵文化財を大切に扱う態度、もっと調べてみようとする意欲などを評価することで、ふるさとの歴史に対する興味・関心を高められると考えた。

②児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートの作成

児童生徒が自己の学びを整理するために、授業ノートを作成した（図8）。単位時間の学習の流れや、児童生徒の思考の流れを明らかにできるよう、以下の点について留意した。

・文字の量

児童生徒が抵抗なく書くことができるよう、授業者側からの指示や問いかけなどの文字を極力排したノ

ートを作成することで、思考の流れがスムーズになると考えた。

・レイアウト

導入での課題づくり、展開での観察事項の記録、終末でのまとめと振り返りというように、授業の流れに沿ったレイアウトとした。展開では文字・絵・模様の写しとりなどができるよう白紙とし、比較しやすいよう枠を並列に配置した。板書もこの配置で行った。

(吉田)

5 平成 26 年度の実践の成果と課題

出前授業における平成 26 年度までの懸案事項を解消すべく授業改善研究を進めてきた結果、以下の成果と課題があげられる。

<成果>

- ・当センター保管の調査成果を授業用資料として活用できるよう、児童生徒の興味・関心を視点にして時代別・地域別に教材化することで、提示する出土品やパネル類を授業者全体で検討しながら選定し、教材化・資料化することができた。(研究内容 1)
- ・学習指導要領及び県内公立学校採択教科書の学習目標に準じて、当センター出前授業学習指導案のねらいを明確にし、単元指導計画への位置付けを検討することで、学校教育との連携を意識した学習指導案の作成ができた。(研究内容 2)
- ・児童生徒の学習活動を円滑に進めるため、学習指導案に指導・援助のあり方を明確にして位置付けることで、多様な児童生徒に対応する心構えや積極的指導への意識付けを構築することができた。(研究内容 3)

<課題>

- ・出前授業実践をもとに研究を進めていないことから、授業の展開、児童生徒の思考の流れなどが十分把握できているとは言い難い。次年度の実践を踏まえながら学習指導案や提示資料など全体を改善しながら研究をさらに進めていく必要がある。
- ・出前授業は当センター職員全員が行うため、授業改善研究グループで検討した内容について、当センター職員に周知していく必要がある。次年度当初に授業の展開方法やその意図について全体で周知する機会を設け、内容について検討していく必要がある。

次年度は、当センター職員の協力を得つつ複数の目で検討していくことで、県民のニーズに応えることができる授業を、実践をもとに確立していきたいと考えている。

(河合)

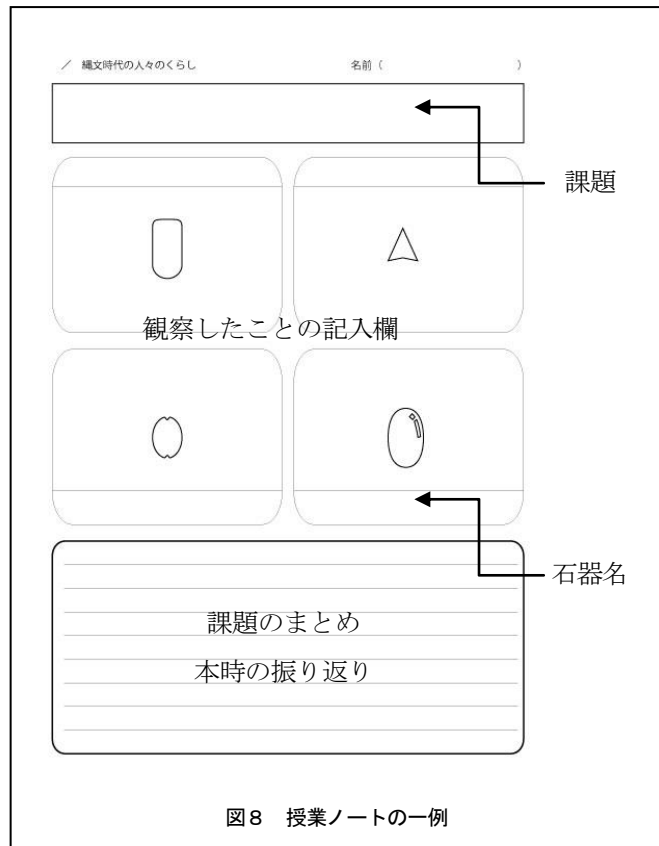


図8 授業ノートの一例

6 平成 27 年度の実践

平成 27 年度は、平成 26 年度の取組みをもとに、延べ 54 校、90 クラス、2,290 人（平成 27 年 12 月末現在）を対象に出前授業を実施してきた。

（１） 実践１「縄文時代の人々の暮らし」の具体と考察（Ａ小学校 6 学年の実践）

①「食」に関わる石器に特化したこと（研究内容 1）

この実践では、縄文時代の「食」に関わる石器（打製石斧、石鏃、石錘、磨石・叩石）を取り上げ、実物に触れながらその特徴を捉え、用途を考えることを通して縄文時代の人々の生活の様子を考える学習を行った。石器は、その特徴と縄文時代の食べ物とを容易に関連付けできるものとして、以下の 4 つに絞った。

- ・打製石斧・・・**根菜類**を採るために穴を掘る道具
- ・打製石鏃・・・**動物**を狩るための道具
- ・石錘・・・・・・**魚**を獲るための道具
- ・磨石・叩石・・・**種実類**をすりつぶすための道具

当センターの所蔵する出土品の中から、「食」に関わる石器で、その石器の特徴を把握しやすいものを精選し、箱に 1 つずつ入れてグループごとに配付した（写真 3）。児童たちには、（ア）すべて食べ物を手に入れるための道具であること、（イ）形や大きさ、重さなどの特徴を比較すること、（ウ）自分たちの生活と関連付けて考えること、という追究の視点を提示し、グループで話し合いながら石器の用途を考える活動を位置付けた。

グループ追究事例 1 では、話し合いの中で「形」をもとにして「使い方」を考える姿が見られた。C 1 は打製石斧の略長方形型と刃部を有することに着目し、「手で握ることができる大きさ」、「周縁部の鋭さ」から「動物と戦うための道具」に結び付けている。その意見に対し C 2 は「動物のすばやさ」から「打製石斧を狩りの道具とするのは難しい」としている。C 2 の意見を受けて C 3 は「打製石鏃の先端の鋭さ」から「狩りの道具として適切」と判断している。「どうしてそう思うのか」という T 1 の切り返しによって「木に括り付けて、弓で飛ばす」という使い方に言及させることで、C 2 の賛成意見を引き出し、考えを共有することができた。



写真 3 配付した石器

【グループ追究事例 1】

- C 1：（打製石斧を握り）持ち方はこうかな。なんか戦えるね。
 C 2：うさぎとか獲るのかな。（狩るのは）難しそうだ。
 C 3：（打製石鏃をもって）（うさぎを獲るなら）こっちのほうがいいよ。尖っているし。
 T 1：どうしてそう思いますか。
 C 3：弓矢の矢のようだから、木に括り付けて、弓で飛ばして、動物を狩ることができる。
 C 2：弓矢いいね。これ（石鏃）は、動物を狩るための道具になるね。

グループ追究事例2では、話し合いの中で「特徴」をもとにして「使い方」を考える姿が見られた。C5・C6は「磨石の重さ」、「表面の磨痕」に他の石器との比較中に気付き、C7は「磨痕の集中部」があることに気づいている。どのように使用するとそのような特徴が現れるのかを考え、実物を手に取って動作を行うことでC5・C7の気付きにつながったといえる。

つまり、「実物に触れる」ことで実際の使い方について体験を通して考察し、「食に関する石器に絞る」ことで、より自らの生活経験と重ねて考えることができることから適不適を判断しやすいという、児童が主体的に取り組むことができる教材であるといえる。

【グループ追究事例2】

- T2：磨石と他の石を比べて触り心地はどうか。
 C5：おっもい。表はつるつるしているよ。
 C6：これ（打製石鏃）は触ったら切れそうだけど、磨石はつるつるして持ちやすい。
 C7：けど全部がつるつるしているわけじゃないよ。ざらざらのところもある。
 C6：なんでここだけつるつるなのかな。触って気持ちいい。
 C全：うーん。
 C5：こすったんじゃないの。
 C7：木の実、どんぐり！これでこうやって（動作）。
 C8：すりつぶすんじゃない。名前も磨石だし。
 C5：どんぐりを割ったり、すりつぶしたりしたんだと思う。

②児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートの作成（研究内容3）

単位時間の思考の流れがノート1ページ分に表示されるよう授業ノートを作成した。

図9は、石器の特徴を端的に書き（事例中の下線部）、見つけた事実をもとにその用途を考えようとしている（事例中の破線部）。また、矢印を使って見つけたことと考えを結ぶことで、自分の考えの根拠として分かりやすく示すことができている。さらに、板書をノートと同じ配置にすることで、どの石器について交流し、深めているのかが視覚的に意識でき、授業では仲間の考えと自分の考えを関連付けながら発表する姿が見られた。これは、石器のイラストをノートに位置付けることで、観察したこと（石器の特徴）を書き込むことができ、事実をもとにそ

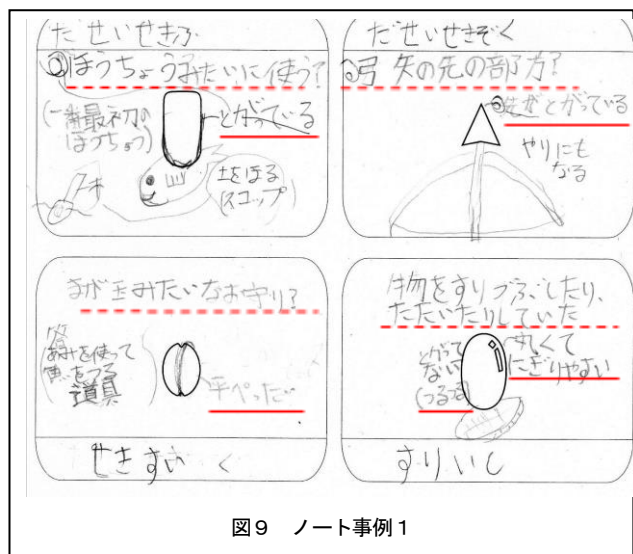


図9 ノート事例1

の事象の意味を追究することにつながったと考えられる。また、言葉だけでなく加工痕跡や模様などを図化する児童もあり、児童の多様な気付きに対応できたことが興味・関心を高めることにつながったと考えられる。

図10は、個人追究で自分の考えを明らかにした後に交流することで、自分の考えが変容したことを実感できた例である。個人追究では、打製石斧周縁部の鋭さから武器（動物を獲る道具）と考えていたが、交流を通じて事実を理解し、驚きをもって感想に記している。事実について理解を深めさせるためには、（ア）個の認識を明確にすること、（イ）明確にした認識について根拠をもとに確かめること、の2点が重要である。さらに認識がずれていれば事実と向き合った時に驚きが生まれ、驚きを伴うことはより認識を深めることにつながると考えられる。ノート事例2は上段でこの認識（ア）を明確にし、交流後の感想で事実を理解する（イ）ことができおり、児童の思考の流れに即したものであるといえる。しかし、授業者

側からの指示や問いかけなどの文字を極力排したノートを意図的に作成したことで、思考の流れをスムーズにしたよさがある反面、授業者の指示の聞き漏らしによる作業の停滞や石器の名称記入の不徹底などが見られたことから、授業者の指示の徹底方法やノートに掲載する指示文章等について再検討する必要がある。(井手)

(2) 実践2「弥生時代の人々の暮らし」の具体と考察(B小学校6学年の実践)

①学習過程の改善と単元指導計画への位置付けの明確化(研究内容2)

(a) 展開と板書の工夫

今回の実践では、弥生時代の人々について「2つの時代の土器を比較して特徴をつかむ」ことで「土器のつくりの変化に気付き」、その変化が「当時の人々が生活改善の工夫や努力をしてきた」につながり、地域からの出土品を使用することで「ふるさとの歴史に興味・関心をもつ」ことをねらいとしている。当センターは具体物を提示することができるため、学習過程の中でも「2つの時代の土器を比較して特徴をつかむ」ことに重点を置いて学習を進めることとした。そのため従来までの、

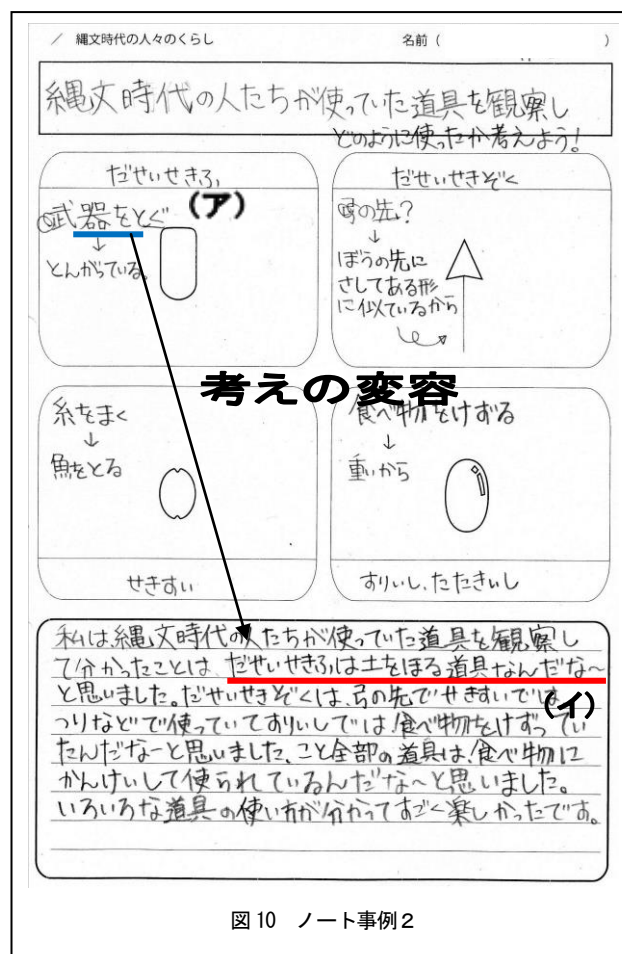


図10 ノート事例2

弥生土器と縄文土器を比べよう。

と設定していた学習課題を、

弥生時代の人々が使っていた土器は縄文時代の人々が使っていた土器と比べてどのようなちがひがあるか見つけよう。

と、焦点化・具体化することとした。さらに、板書計画(図11)を作成し、学習過程の流れや、2つの時代の土器の特徴の違いが視覚的に理解できるよう工夫した。そうすることにより、授業者が児童に何を見付けさせるとよいか明確になり、適切な指導ができるようになった。また、児童は実物を目にしたり手にしたりすることに加え、授業者からの意図的な発問によって、ねらいにつながるような多くの特徴を見付け出すことができた。また、授業者による机間指導での児童への認めや励ましによって、見付け出した多くの情報に自信をもち、全体場で積極的に交流することができた。積極的な交流によって特徴の違いについて共通理解を図ることができ、土器の特徴の変化が生活様式の変化や当時の人々の工夫や努力に関わっているという本時のねらいに的確に迫ることができた。

(b) 単元における本時の役割の明確化

本時は、小学校で実践する場合、6年生社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」の単元に位置づく学習活動である。児童はこの学習活動に入る前に、縄文時代と弥生時代のくらしについて学習をしていることが多い。この場合の学習活動では「2つの時代についての学んだ知識を、実感を伴った理解へと深めること」、「今後の歴史学習に対して興味・関心を喚起すること」をその役割として設定している。

そのために、(a)で述べたような学習活動を展開したり、後述する資料を工夫したりすることに重点をおいた。また、事前に学級担任からどのような学習を進めてきたかを聞き取ったり、導入で児童に縄文時代や弥生時代についてどのような知識をもっているか尋ねたりした。なかには、「社会の授業はきらい。」と答える児童もいたが、興味・関心を喚起する学習活動を行ったことで、事後のまとめでは「楽しかった。」と感想をもつ児童が多く見られた。

②追究意欲を高めるための指導方法の工夫について（研究内容3）

(a) 教具の工夫

先の課題を提示した後、一人1セットずつ、「5000年前の土器と2000年前の土器です。」と伝えながら弥生土器と縄文土器の土器片を配付した。本物の出土品を手にする事で、児童は目を輝かせ、それぞれの土器の特徴を見つけようと、黙々とノートに向かう姿が見られ、その後の追究意欲につながった。

土器を配付する際には土器の種類（名称）を伏せておき、それぞれ赤色と黄色のシールを貼るだけとした。このことにより、多くの特徴を見つけ、その特徴を根拠として土器の種類を探っていくとする社会的事象の意味を追究する意欲を喚起させることができた。児童は一つずつ土器片を手にとったり、両手に2つの土器片を持って比べたり、なかには手触りや見た目だけでなく、においを嗅ぎなが

4/24 弥生時代の人々のくらし

縄文時代→弥生時代

- ・弥生土器を使用
- ・吉野ヶ里遺跡が有名
- ・米作りをはじめ
- ・石包丁を使う
- ・ムラどうしの争い

縄文に使用された道具の図

近隣の発掘調査

縄文土器と弥生土器を比べよう。

赤・・・縄文時代の土器	黄・・・弥生時代の土器
・分厚い	・うすい
・模様がある	・模様がないうえ、見えにくい
・ゴテゴテしている	・さっぱりしている
・ザラザラしている	・ツルツルしている
・砂つぶが見える	・砂つぶが少ない
・色が暗い	・色が明るい
・重い	・比べると軽い
・崩れやすそう	・かたい感じがする
・じょうぶでなさそう	・じょうぶな感じがする

土器（道具）の変化＝生活の変化

- ・飾りじゃなくて、使いやすいものへと変化していった
- ・技術が進歩して、うすい土器を作れるようになった。
- ・米作りが始まって、それに関係する道具が使われるようになった。
- ・今の時代に似た道具を使うようになっていった。

図 11 「弥生時代の人々のくらし」板書計画



写真4 縄文土器に触れる様子



写真5 土器を比べる様子

ら何か特徴はないかと探ったりする姿も見られた。

このようにして、「薄い・厚い」、「ザラザラ・ツルツル」、「硬い・柔らかい」、「粒が粗い・細かい」など、それぞれの土器の特徴を比較しながらノートにまとめ、「薄く作れるようになった」、「精巧に、丁寧に作れるようになった」、「細かい粒だけを選別できるようになった」など、時代の変化と当時の人々の工夫や努力についての根拠を、土器を通して明確にしていけることができた。

(b) 資料提示の工夫

個人追究では一人1セットの土器片を配付し、全体交流では、全員で一つの土器片を見ながら考えを深めたり、広げたりするようにした。

その際に活用したのが視聴覚機器である。「赤のシールの土器は砂粒が粗いけど、黄色のシールの土器は細かいです。」というように発言する際、自分が観察した土器片をモニターに映し出すようにした。この提示の仕方によって、全員で土器の特徴についての共通理解を図ったり、実際に自分の手元にある土器片を再確認したりしながら理解を

深めることができた。そして、それぞれの土器の特徴をまとめ、それを根拠にしながら土器の種類を確定させたり、土器の違いが生活様式の違いにつながっていることに気づかせたりすることができた。学校において視聴覚機器が整備されつつある現在、調査の成果を視覚的に捉えさせるコンテンツを開発していくことは、教育普及において有効な手立てであると考えられる。

(古屋)



写真6 大型モニター

(3) 実践3 「古墳時代の文化」の具体と考察 (C小学校6学年の実践)

①導入から課題化について (研究内容2)

この学習を行った学級では、古墳時代は未学習であったため、導入部分で「弥生時代」と「古墳時代」の新旧関係を確認した。次に持参した土器が約2000年前のものと約1500年前のものであることを説明し、板書に位置付けた。その後、古墳時代には「新しい土器」が作られるようになったことを紹介し、弥生土器と比べてどのように新しくなったのか分かるようになることを課題とした。2種類の土器には約500年間の差があるという事実を授業の冒頭で認識させたことで、「500年もの



写真7 鉄製品の観察の様子

間にどんな変化があったのか」という意識を途切れさせずに学習することができた。

②提示資料について（研究内容 1・3）

実際に土器を観察することを伝えた際に、児童から大きな反応があった。また、持参した出土品が岐阜県で出土したものであることに対しても、児童は強い反応を示していた。児童生徒が学習対象との距離を感じることは歴史学習の課題であるが、身近な地域で出土した出土品を教材として用いることは、この距離感を取り除き、意欲的に学習に参加する手段として非常に効果的だと言える。また、授業の終盤で、地域の古墳の紹介と実際の出土品の提示を行った。この遺跡は児童にとって身近な場所ということもあり、大きな反応が起こった。自分たちの身近な場所に大きな力をもった人物が存在していたことへの驚きや感動がまとめの記述にも表れていた。本時の授業のねらいである「土器製作当時の人々の工夫や努力という視点から時代の変化に気付き、大きな力をもつ人物の存在を知ることとふるさとの歴史に興味・関心をもつ」ことを達成するために、最適な資料選択であったと考えられる。

③土器の新旧判別について（研究内容 2）

弥生土器と須恵器との新旧判別の根拠について、授業者が想定していた内容があまり出なかった。弥生時代の学習が終わった時点での本時の授業であったため、弥生土器との色の違いから判断している児童が多かった。そのため、当時の人々の工夫や努力という視点からの意見があまり出てこなかった。交流の序盤に、「黄色シール（弥生土器）は表面が滑らかなので、技術が進歩しているから黄色シールの方が新しい。」という意見が出た。この後、どちらが新しいか全体に尋ねると2つに分かれた。双方から



写真8 土器を比べる様子

その根拠を尋ねると、青シール（須恵器）については「曲線を作るのは難しい。」という意見はあったが、「堅い。」という意見はなかった。黄色シールについては「表面が滑らか。」という意見が多数だった。その後は意見が停滞したため、「ロクロ」の導入について説明すると、土器に入る横向きの線とロクロとを関連付ける意見が出た。この発言をきっかけに全員が青色シールの方が新しいことに納得した。当時の人々の工夫や努力について気付かせたい場合、小学生には難語句である「ロクロ」について説明するのではなく、それに気づけるような発問を位置付けることや、観察用土器はねらいの達成に適したものを選ぶことが重要である。

（佐竹）

（4）実践4 体験重視型「土器を比べよう」の具体と実践（D小学校特別支援学級の実践）

今年度、特別支援学級から「土器を比べよう」の実施依頼があった。特別支援学級での実践は初めてであったことから、学級担任と事前に綿密な打合せを行い、児童に地域の歴史に対する興味・関心を高められるよう、体験型学習活動を取り入れることにした。

①提示する出土品や資料の意図的選定（研究内容2）

縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の4つの時代の本物の土器を手にとって色や手触りの違いを体感することで、歴史への興味・関心を高められると考えたため、提示する出土品は通常学級と同じものを使用した。ただし、各自に配付する土器片の器種や部位は可能な限り統一した。統一することで児童の考える足場を共通化でき、意見交流やまとめの段階で土器の違いによるつまずきや混乱を極力排することができる考えた。また、完形品の選定にあたっては、手にとった土器片と色や文様が類似するもの、児童が経験から語ることができるような各時代の生活用具としての特徴が表れているものとした。このことにより土器の特徴の照合作業が容易になり、各時代の土器の特徴を捉えやすくなったと考えられる。

「土器に触れる」活動を重視し、授業ノートは使用せず、提示資料は必要最小限とした。提示資料として使用したものは当センターが調査した遺跡紹介パネルである。理由は校区内にある遺跡であることや出土した状況を視覚的に捉えさせることで、児童の興味・関心を高められると考えたためである。パネルに写っている遺跡全体の写真を見て、「あっ、ここ知っているよ。」と気付いたり、縄文土器深鉢の完形品を出土状況写真とともに提示したときに「こんなふうに土器が埋まっていたのだ。」とつぶやいたりする姿から、児童が歴史をより身近に感じ、興味・関心を高めることにつながったと考えられる。



写真9 縄文土器に驚く児童

②「違い」比べと「同じ」見つけ（研究内容3）

導入では、4つの時代の土器片を各自に1点ずつ時代順に配付し、「この中で一番古い土器はどれか分かるかな。」と問いかけた。この発問によって、「古さの根拠」を見つけるために、目を近づけたり触れたりして「違い」を探す姿が見られた。大きさや色、形、文様などの「違い」への気付きを認めた後、一番古い土器（縄文土器深鉢）の完形品を提示した。「この一番古い土器とそっくりな土器のかけらはどれかな。」と問いかけた。児童は、「似ている根拠」を見つけるために、土器片を手にとって完形品に近づけて「同じ」見つけに集中した。このように発達段階に合わせて、「違い」を見つける活動と、「同じ」を見つける活動を分けて焦点化することで、思考の流れがスムーズになり、意欲的に活動ができた。

（吉田）

（5）実践5 クラブ活動に対応した「日本で使われた中国の貨幣と商業経済の発達」の具体と実践（E 小学校クラブ活動の実践）

①導入に出土品を提示するよさ（研究内容1）

導入で、近隣遺跡出土の中国銭を提示した。「当時の人が使っていたお金であること」、「私たちの身近な場所で出土したこと」から、児童の興味・関心を高められると考えた。児童は、「本物なんだ。」、「学校の近くにもあったんだ。」、「近くにも当時の人々が住んでいたんだ。」、「お金があるということは、当時もお店があったのかな。」などの意見・疑問がだされ、「中国のお金はどのように使われていたのか」という

課題に結び付いた。

②追究時に提示する資料の魅力（研究内容 1）

課題提示後、「定期市のような『一遍上人絵伝』」を提示し、貨幣が使われている場面を探すことで課題を追究した。この時、ただ貨幣を使用している人物を探すことを目的とするのではなく、「どこで」、「だれが」、「何をしているか」を視点として与えることで、貨幣を介して行われていることに目を向けさせるようにした。これにより、「笠をかぶった女の人が布を見せている。その前の男の人がお金をもっている。布を買おうとお金を出しているところかな。」「白布をかぶった女の人が布を差し出している。その前で店の女の人がお金を数えている。お店に布を売りに来たのかな。」と、貨幣の利用が物の売買に関するものであることを予想することができた。

指導案中の「深める」に位置付けた「貨幣経済の浸透」については、米と銭の交換比率を示し、同価値時の重さを知らせることで「貨幣の便利さ」に気付かせた。さらに、当時の世の中に急激に浸透していったことを、グラフを用いて知らせた。ねらいの達成のために必要な資料を順に提示することで、歴史学習未経験の4・5年生にとって思考の流れがスムーズとなり、歴史学習に対する興味・関心を喚起させることができたと考える。ただ、提示する資料が多いため児童の意識が分散し、焦点化しきれないおそれがあることから、提示する資料をさらに精選する必要がある。しかしながら、近隣の遺跡からの出土品を提示することや、発達段階に応じて資料を順に追究することは、歴史学習に対する興味・関心を高め、歴史を自分たちの身近なものとするのに極めて有効であると言える。

(河合)

7 平成 27 年度の実践の成果と課題

平成 27 年度は、平成 26 年度に行った授業改善研究の成果と課題をもとに、出前授業を実施した。その結果、以下の成果と課題があげられる。

<成果>

- ・縄文時代の学習において、授業で取り上げる遺物を「食」に関わる石器に特化したことで、自らの生活経験と重ね合わせながら考える児童の姿につながった。また、実物の石器に触れることで、石器の特徴を根拠にしてその使い方や当時の生活などの社会的意味を追究することができたことから、児童生徒の主体的な取り組みを促すのに有効な教材であった。(研究内容 1)
- ・近隣の遺跡で出土した遺物を持参して授業を行ったことで、児童生徒が強い関心をもち、意欲的に学習に取り組むことができた。各校の実態に応じて、時代ごと・地域ごとで資料を選択し、より身近な資料を開発したことで、児童生徒が歴史学習を自分たちの身近なものとすることができた。(研究内容 1)
- ・授業のねらいを明確にして学習指導案を作成し、そのねらいに迫るための授業シナリオや板書計画を作成したことで、授業者が児童生徒に何を見つけさせるとよいか明らかになり、適切な発問・助言につながった。また、その適切な発問・助言が本時のねらいに迫る児童生徒の姿につながった。(研究内容 2)
- ・発達段階や学習形態に応じて学習活動を設定し、手で触れたり、視覚的に捉えたりできるように工夫したことで、児童生徒の関心を高めることができた。各校の実態に応じて、学級担任と連携して授業内容を吟味することや、提示する遺物や資料を精選することは、児童生徒の歴史学習に対する追究意欲を高

めたり、歴史的事象を適切に理解したりすることに有効であった。(研究内容2)

- ・児童生徒の思考の流れに沿った授業ノートを作成したことで、児童が学びの中での自らの考えの変容を実感することができた。また、授業ノートの中にイラストを位置付けたことは、観察したことを書き込んだり、矢印を使って事実を根拠にして考えをもったりする児童の姿につながり、児童の思考を助ける上で効果的であった。(研究内容3)
- ・土器を比較する学習では、土器の種類(名称)を伏せておき、色のついたシールを貼ることで、児童がその土器の特徴に着目して、その用途を考えることができた。児童の追究意欲を高めることや思考の流れをスムーズにすることに有効な手立てであった(研究内容3)。

<課題>

- ・「古墳時代」、「中世」の実践では、学習指導案と児童生徒の反応に差が見られた。特に、授業の流れや提示資料について改善点が多いことから、今年度の実践をもとに学習指導案の見直しを行い、児童生徒がより興味・関心をもてるように改善していく必要がある。(研究内容1・研究内容2)
- ・土器の新旧判別については、色の違いのみに着目して判断する児童生徒の姿が多く見られた。「土器を新旧判別する活動を通して、当時の人々の工夫や努力を捉えさせる」という授業のねらいに迫るために、授業者の発問を精査すること、形や質感に着目できる土器を選ぶこと、追究の視点を明らかにした上で活動に入ることなどの工夫が必要である。(研究内容2)
- ・授業者によって授業ノートの捉えにずれがあったことから、実際の授業の中で児童生徒の思考の流れを止めてしまう場面があった。授業ノートの活用方法について、職員間の意思疎通をさらに深め、授業のねらいに迫るための援助内容や授業ノートの工夫について検討する必要がある。(研究内容3) (笠井)

8 おわりに

図12・13は、平成21年度から平成27年度12月現在の出前授業実施校とその推移である。図12中の白抜き印で示した学校は平成26・27年度に新規依頼していただいた学校である。図13から、徐々にではあるが、確実に増加していることが分かる。

児童生徒は、「初めて土器を触って、たくさんの違いを見つけられて楽しかった。」「昔の人の努力を見つけられてうれしかった。」「自分たちの住んでいるところにも遺跡があるなんてびっくりした。」「次は、違う時代のことを聞かせてください。」など、研究で取り組んできた成果が確実に表れた感想を送ってくれた。学校からの「専門性を生かしつつ、児童生徒たちのやる気を引き出し、ふるさとのよさを伝える素晴らしい内容だった。」「地元で発掘された土器に驚

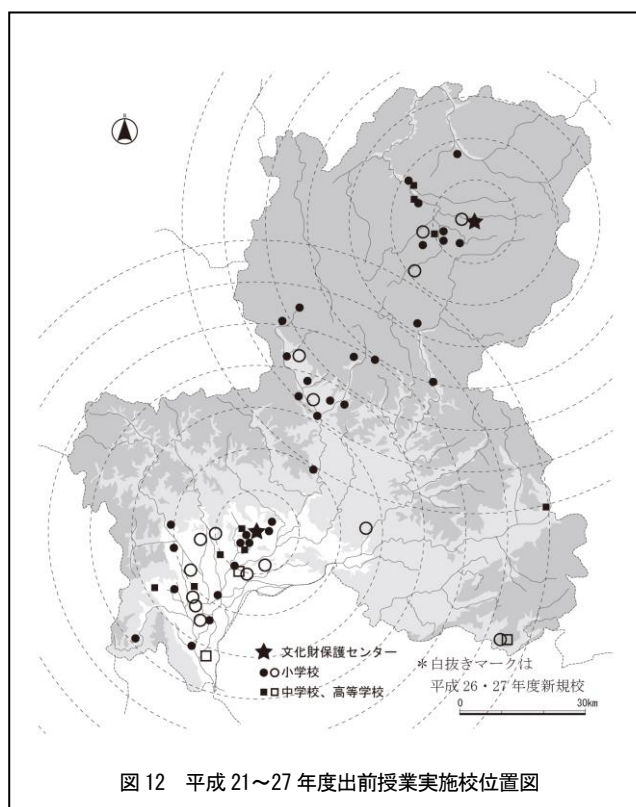
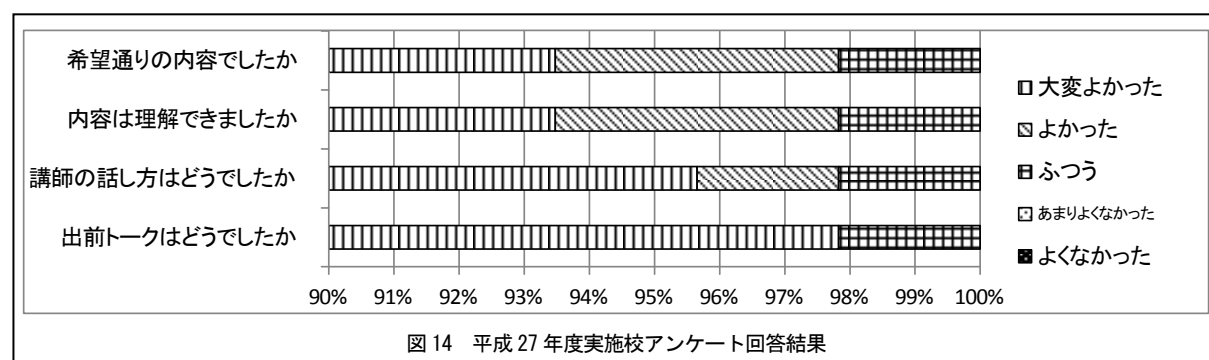
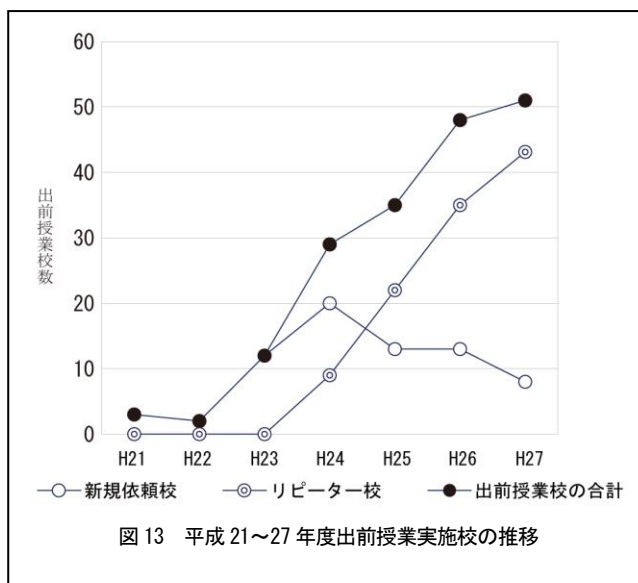


図12 平成21～27年度出前授業実施校位置図

くとともに、縄文時代から地域に人が暮していた事実にも驚きがあった。驚きが子供たちの学習意欲につながっていた。」「つまりいた時のヒントの出し方やテンポよく進める展開で、児童生徒たちが集中して授業に取り組んでいました。」「一度だけでなく、複数回授業をお願いしたい。」といった感想や、図14の実施校アンケート結果から、学校側のニーズにも十分対応できたのではないかと考える。

しかし、職員アンケートでは、「従前の授業より児童生徒の意欲的な姿が見られるようになった」と好感を得た半面、「近隣遺跡の遺物をもつ



て行ったが、完形でなかったため、イメージさせにくかった。リストアップするとよい。」「須恵器片の部位を統一すると、児童生徒の交流で共通理解がしやすい。」「資料の量が多い、精査したい。」「ねらいに即した意見に集約させきれなかったため、補助発問等を精査して導きたい。」など、細部には多くの課題がみられる。

山梨県埋蔵文化財センターの出前授業では、土器焼きや火起こしなどの体験活動の重要性と、土器分類や拓本など見て触って考えることの大切さを提唱しつつ、小学校高学年だけでなく、低学年から中学年の好奇心旺盛な発達段階へのアプローチも有効であるとしている（野代2014）。今回、特別支援学級やクラブ活動の実践を行うことで、歴史学習を行っていない学年であっても、地域の歴史を学ぶ楽しさを味わうことができることが分かった。このことから、下学年の学習に対応できる指導の工夫も今後検討していく必要がある。栃木県立博物館では、一単位時間の出前授業にとどまらず、単元全体を通した博物館と学校の連携を実践することで、収蔵資料の教材化と実践の場の確保が成果であるとしている。また、学校側も豊富な資料と専門的な知識を児童生徒に還元できたことは貴重な経験としている（加藤2014）。当センターも、今年度の実践で3時間分の出前授業を行った学級・学校があった。その際に学校側から「来年度は、ぜひ一単元を出前授業で行いたい。」と申入れがあり、単元を通した連携の検討も視野に入れていく必要がある。

児童生徒たちが埋蔵文化財への興味・関心をもち、高めることができるような出前授業を実践していくために、成果を伸ばしつつ課題を克服し、さらに魅力的な出前授業となるよう、授業改善に今後も尽力し

ていきたいと考えている。

(河合)

<参考文献>

- 野代恵子 2014 「子どもたちに考古学の楽しさを！－出前授業の実践より－」『研究紀要 30』、山梨県考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター
- 加藤正人 2014 「栃木県立博物館の博学連携実践報告－普及資料課の取組みから－」『研究紀要－人文－第 31 号』、栃木県立博物館